

四十二 全国運動

終戦後、物のないときでした。幸い両洋中学の卒業生で原沢宏二という人の実家が京都から汽車で一時間ばかりの園部というところから、歩いて四、五十分かかる丹波町高岡というところにあつたのです。お父さんは原沢小十郎さんといい、土地の名望家で大きな農家でした。私は時々そこに行ってお世話になり、帰る時はいろいろな物をいただいたものでした。速記文字画集の原稿はここで書いたのです。

そのころ長男敏雄がだんだん大きくなり、四歳を過ぎたころです。私について廻るのでなかなか外に出にくいのです。二十二年の九月六日でした。どこに行くといえれば止めるに決まっているのでつい黙って原沢さんの家に出かけたのです。そして十日に帰って来ると敏雄が私を見るなり駆け寄って来て私の足にからみつき、「お父ちゃん！もう、どこにも行かんといやあ、どこに行つたかつてさがすわあ・・・」といて床に泣き伏すのです。またあるときは私が帰って来ると敏雄が喜んでとび回り、板場に伏して涙を流しながら喜ぶのです。また私が遠方に行くときは朝早く出るものですからあるときは「行つたらっしやいと言えないから起きてから行つてやあ・・・」というのです。私はこういう恩愛の情を振り切って全国運動に出かけていたのです。